

2022 年度人文学部 FD 活動報告

(キリスト教学科、人類文化学科、心理人間学科、日本文化学科)

2022 年度は、2021 年度に行った調査とその検討結果を踏まえて、学生の学力の問題（基礎学力の低下、学生間の学力差の拡大、学力が原因で授業についていけない学生や学習面で困難を感じている学生への支援等）に焦点をあてることとした。具体的には、何が理由で学習に困難が生じているのかわからない、学習支援を行おうにも今一つ把握しきれない学生が存在するといった教員の困惑に対応し、発達障害や学習障害を取り上げた。2023 年 2 月 21 日に、これらに詳しく、また学術講演や啓発講演などを積極的に行っておられる吉川徹先生（愛知県医療療育総合センター中央病院児童精神科部長）にご講演をいただき、理解を深めるとともに支援の留意点などについて研鑽を積む機会を設けた。

次に、各学科においての主な取り組みを紹介する。

キリスト教学科では、Zoom で提出者全員が発表するという「研究プロジェクト論文発表会」のあり方について学科会議を中心に議論を重ね、2022 年度は、教育効果の観点から発表者の人数を絞って、発表者には十分な時間を与えて発表してもらい、質問も複数受け付ける形式で開催した。そして開催後に、今後もこの形式を採用するが、来年度はさらに人数を絞り、6~7 人程度で行って、報告者一人ひとりに十分に時間をかける方が効果的ではないかという反省点が提出されたので、こうした点を踏まえて、来年度に更なる改善を試みる。

また、これまでキリスト教学科にはセミナー室の利用規則が制定されておらず、学生に対するセミナー室に関する周知も十分にはなされていなかったため、2 回にわたってセミナー室に関する FD 懇談会を開催し、「キリスト教学科 学生セミナー室・学生ロッカーの運用に関する内規」を作成して学生に知らせ、セミナー室の活用を促した。

人類文化学科では、「研究プロジェクト」の評価方法について検討し、従来の論文本体 70%、口頭試問 30%という評価方法を改め、論文本体 100%とし、ただし、口頭試問の結果を反映させた形で現行の学部共通のルーブリックを用いて評価することとした。また、セミナー室の利用状況に関する学部での調査結果をもとに問題点の洗い出しを行い、セミナー室に関する情報がまだ学生に十分周知されていないため積極的な利用を促すべくさらに働きかける必要があること、また、図書館内にあるセミナー室に関しては環境面で問題が多いことを確認した。

心理人間学科は、①多様な機会をとらえて学生、授業の情報を共有すること、②公認心理師受験資格対応カリキュラムを計画通りに進めること、③新入生、卒業生、オープンキャンパス参加者を対象とした学科教育にかかる調査活動を行うことに加え、④2019 年度に策定した学生の計画的な履修に対する学科の指針に沿った学生指導を行うこと、および⑤授業

外での学習を奨励することを定型化した活動計画としている。2泊3日および Zoom によるハイブリッドで実施した FD 企画において、在学生および卒業生を対象とした学科カリキュラムに関する調査、研究プロジェクト論文指導に関する調査、公認心理師受験資格対応カリキュラムなどのカリキュラムや研究プロジェクト論文などの授業についての現状と課題について報告・議論した。また、学科会議など多様な機会をとらえて学生や授業や授業外での学習についての情報を共有する臨機応変な FD 活動を促進した。それらの議論の結果として、2022 年度には、研究プロジェクト以外の学科科目とディプロマ・ポリシーとの関連に関する調査、在学生が入学前に触れてきた情報に関する調査、学園内高等学校の生徒も参加する研究プロジェクト発表会の3年ぶりの対面開催などを実施することができた。

日本文化学科では、まず、すべての学生が履修する基礎演習および演習の授業を通じて、学生・教員間の緊密なコミュニケーションを図った。また、特別な配慮や指導を要する学生については、学科会議などを通じて教員全体で情報を共有するように努め、指導教員を中心に学科全体で指導することにより対応した。年度末(3月10日)には、「アカデミックライティング教育について」と題した学科 FD 企画を行い、森田先生による1年次の基礎演習 I のこれまでの経緯および現状についての説明、平子先生による3年次の演習 I、4年次の演習 II における自身の実践、工夫などについての報告のあと、参加者全員で活発な討議を行った。今回の学科 FD を通して、アカデミックライティング教育を中心に、学科4年間における一貫性のある教育について、これまでの成果を確認できたことに加え、2年次の基礎演習 II (の位置付け) については継続的に議論・検討が必要であることなど、検討すべき課題が明確になり、有意義であった。また、今後も継続的にこのような機会を設けることが、学科におけるより一層一貫性のある教育を実現するために必要であるという考えを共有することができた。